

東彼杵 ダラフ

12 / 23 郷 大音琴郷

春の風がひんやりしていた大音琴郷に、
手づくりのあたたかい癒し空間ができた。
地元を愛する女性たちがきらきらして、
とってもいい気分になった。

制作 地域おこし協力隊
飯塚 将次 (文)、堀越 一孝 (写真)
小玉 大介 (デザイン・写真)

ベテラン漁師の浦政則・満代さんと
晴れて船出した大倉諭・亜希子さん

大きな 琴の音の郷へ



↑ずっと遠くの立神の鼻から静かな海面をはって聞こえてきたという琴の音

大村湾には“琴の湖（うみ）”という美しい別名がある。諸説あるなかで東彼杵町の伝説はこうだ。遠い遠い昔、立神の鼻というところに天女が舞い降り、その情景に魅せられて大きな琴を奏でると、静寂な夜に妙なる調べが広がり、人々はいつまでも耳を傾けていたという。立神の鼻は現在のそのぎシーサイド公園のあたり。そこから穏やかな海面をはって、琴の音が大きく聞こえたのが大音琴郷、小さく聞こえたのが小音琴郷と言われるようになったそうだ。

公園から対角線上にある音琴漁港を歩いてみた。船着場はいくつかに分かれていて、沖から小舟が方々へ戻ってくる。耳を澄ますと琴の音ではなく、かすれたラジオが聞こえた。近づくと3人のチームワークで黙々と作業中。ムラサキウニがいっぱい入ったコンテナをひっくり返して、トゲトゲの山から1個ずつ取って口を開く、バケツでじゃぶじゃぶ洗う、生殖腺を取り除くという流れ。食べられる状態になったウニは町内の寿司店などへ卸していると教えてくれた。

「なんばしよっとね（笑）」。港の最奥部で漁師の浦政則さんから声をかけられる。政則さんは数年前までは五島列島へ行き、船に泊まり込みながらヤリイカ漁をしていたが、「ここらでも商売が年中あるけん」と大村湾をメインとした漁に切りかえた。最近のうれしい出来事は、娘の亜希子さんが福岡から帰って来たこと。しかも漁師の後継者を連れて。「漁師としてはまだまだあー」と政則さん。それでも、「沖へ毎日連れて行き教えよっとよ」と言葉の端々は弾んでいた。



↑モズクに付いたごみを丁寧に取り除く。この後、湯がいてさらに選別する



↑美容室の代表も務める大倉諭さん。漁が終われば亜希子さんをサポート

小さな港町に 新しい音色

福岡でアパレルの仕事をしていた大倉諭さんは、亜希子さんとの結婚を機に浦地区の住民になった。もちろん漁師歴はゼロ。生活はガラッと変わったが、毎日が充実していると言う。「こっちでやりたいことはいろいろありますけど、今は漁師になるために必死です。1年を通して海に出てまずは漁の流れをつかみたい」とやる気十分。沖あがりすれば義母の満代さんが獲ってきたモズクの選別の手伝いをする。慣れた手つきの満代さんと並ぶとまだ初々しいものの、サロベットの着こなしはさすがに決まっていた。「ここのモズクは格別に旨いですよ。今まで食べていたのと比べて味が全然違います。道の駅で売っていますからぜひ」とPRも忘れなかった。

「地元で美容室をやりたい」。亜希さんは中学生の頃から周りにそう話していた。高校卒業後、福岡の美容専門学校を経て個人店や百貨店、セットサロンでキャリアを積んだ。20歳半ばで30歳までに開業する目標を日記に書いた。決して順風満帆だったわけではない。仕事に熱心で細かいところにまでこだわる亜希子さん。腕が認められて引き抜かれたのはよかったが、オーナーとの考え方の違いに気づく。雇われる身では自分の色は出せなかった。迎えてくれたオーナーへの恩もあり悩んだ。体調を崩

して寝込んだ時、満代さんの温かい言葉に救われた。「帰っておいでー」

夢を現実のものにするためにUターンを決意。諭さんも仕事を辞めて付いてきてくれた。浦地区で空き家を見つけると夫婦で作業着に着替えた。「一時は美容師でなく大工や左官になったよー。内装は自分たちでしたけん」と亜希子さんは明るく話す。町の空き店舗等活用促進事業も活用して一般的な美容室開店資金の半値ほどで、こだわりが詰まった古民家美容室 LOLO（ロロ）をオープンできた。「店名は本物志向という思いから。オーガニックにもこだわって。あと、近所のおばちゃんたちに覚えやすくしたかった。だけん美容室メバルも考えた。魚のメバル。家は漁師やけん(笑)」

美容室は完全予約制。1台のスタイリングチェアでじっくり時間を使い、客とリラクゼーション空間を共有する。故郷を離れた10年で浦島太郎状態になった亜希子さん。「たくさんのお客さんと話をしている。いろいろな情報を入手したい。ここを拠点に大好きな地元にたくさんのお返しができるかなと思います。音琴小にも顔を出したい」

都会の荒波に揉まれて戻ってきた小さな港。たくましく成長した姿で新たな音色を響かせる。



↑ 店名を彫って、オイルを塗って看板も手づくりにこだわった

← 家にいるような感覚で居心地のいい古民家美容室 LOLO
「本物を提供する癒しの美容室にしたい」と大倉亜希子さん

田園に漂う甘い香り



↑お店は国道 205 号から音琴小学校方面へ行き
小さな看板をたどる



↑寒そうな表情の私たちへ特別にコーヒーを出してくれた
琴浦聡美さん



↑シフォンやキッシュなどどれもおすすめ。
営業は金・土・日曜、祝日のみ

音琴小学校近くに“焼菓子 KOTOURA”の小さな看板を見つけた。田園風景を見ながらお菓子づくりに精を出す琴浦聡美さんは、道の駅や予約での販売のみをしていたが、「お店を出せばいいのに」という声に後押しされて、実家の裏を改装して販売スペースを作った。「道の駅は野菜を買いに来る人がついでにお菓子も買ってくれる。でも、お菓子を目当ての人は常時あるかわからないお菓子を買いに足を運んでくれないのではと思ったんです」と琴浦さん。

福岡の専門学校を出てケーキ店で働き、腕を磨いた。休日には評判のお店をめぐり、美味しいと思ったものは自分で作ってみてレシピをストックしていく。「福岡の美味しいところはほぼ行きましたよ。九州だけでなく京都や大阪、神戸にも」。今では何でも作れるようになり、JR イベント列車のスイーツトレインではそのぎ茶大福やそのぎ茶プリンを提供して乗客に好評だった。

実はまだ夢の途中。「音琴小学校のプールから見る大村湾の景色が好きなんです。そのあたりにカフェを出すのが最終的な目標ですね」と話す琴浦さん。まずは地元で愛されるお店を目指す。オープンして間もないが、硬貨を握りしめて買いに来てくれるかわいい常連もできた。子どもたちが大きくなる頃、小学校の思い出を語れる素敵なお店ができていくかもしれない。

※大音琴郷へは、町営バス「音琴宮下」のバス停を利用。
次回は口木田郷。お楽しみに！